

「中性紙」とスリップの交換

石井 健

ISHII Takeshi

1980年代以来日本では、酸性紙問題をきっかけに書籍の保存に対する関心が高まり、それに伴って「中性紙」と銘打たれた洋紙が様々な企業から製造されるようになった。古典資料センターでも、開所以来所蔵資料の保存に対して深い関心を寄せてきたが、資料の請求番号の記入や図書IDを示すバーコードの貼付を直接資料に対して行わず、「中性紙」スリップを介して行う方法が採用されたのも、その現れの一つであった。

ところが、一昨年七月のことである、このスリップに使われた「中性紙」が実は中性紙ではないのではないかという疑いが生じた。メーカーに問い合わせをしたものの、疑念は解消せず、結局東京芸大の稲葉助教授や東京農工大の岡山助教授といった紙の専門研究者や民間の研究所に調査を依頼することとなった。しかしその結果は当初の目的を超えて驚くべきものとなった。まだ正式な報告書を受け取っていないことと、これから本格的な実験・追試を行うということなのでここでは詳しく説明しないが、とにかく問題の洋紙が何らかの酸性物質を含んだものであること、そして、こうした紙を書物に挟んで使用していると紙の酸性化が通常よりも促進されるおそれがあるだけでなく書物に対しても悪影響を与えかねないことがわかった。

そこで、センターではスリップの台紙を問題の「中性紙」からアルカリ物質を含有した保存用洋紙に切り替え、現在に至っている。世界的に貴重な西洋社会科学古典資料を預かる以上、その保存・管理には最大限の努力を払う義務を負う我々としては、今後も国内外での保存科学研究の動向に留意しつつ、それとともにセンター内でも独自に保存科学研究を推進する必要があるだろう。